

C-30 幼児服設計のための基礎的研究(第1報) — 幼児の成長様相 —
十文字学園女短大 ○古松弥生 関東学院女短大 岡田宣子
お茶の水女大家政 三田村陽子 栗原純代

目的 幼児服設計のための基礎的研究として、幼児を対象として身体計測を行なった。
第1報では、幼児の成長様相を把握することを目的とする。

方法 資料は、昭和52年7月～9月に、東京都豊島区の20ヶ所の保育園で計測して得た10ヶ月から6歳3ヶ月までの男児773名、女児695名、計1468名である。計測項目は33項目であるが、今回はそのうちの長径4項目(身長・下肢長(腸骨棘高をそのまま用いた)・上肢長・足長)、幅径2項目(肩峰幅・腰部横径)、周径6項目(頭囲・胸囲・腹囲・腰囲・上腕最大囲・大腿最大囲)及び体重の合計13項目について、性別・年齢別に統計処理を行ない、幼児の成長様相を検討した。

結果 1) 幼児期には、全項目とも漸増するが、体重の成長速度が最も大で、男女とも6歳では、1歳の約2.1倍となる。2) 長径項目のなかでは下肢長の成長が最も急速であり下肢と上肢との差は、年齢が進むに従い増大する。また身長の増加量のうち下肢長の増加量の占める割合は大きく、従って上体の成長は緩慢であるといえる。3) 幅径項目の成長は長径項目の成長に先行し、肩峰幅の成長は腰部横径の成長よりも急速であり、肩峰幅と腰部横径との差は年齢が進むに従い増大する。4) 周径項目においては、頭囲、上腕最大囲の成長は緩慢である。また大腿最大囲の成長は急速であるので、上腕最大囲と大腿最大囲との差は年齢が進むに従い増大する。躯幹部の周径項目では、腰囲の成長が著しく、1歳では腰囲は胸囲より小さいが、女児では25歳、男児では3歳から胸囲より大きくなり年齢が進むに従いその差は増大する。男児と女児を比較すると女児の方が胸囲と腰囲との差は著しい。